

その肥後の国熊本の家中小山川蔭氏も、このように考えておられる。

また、この寺を「相良寺」という。本当は「吾平寺」であるのに、「相良」という文字を変えて書かれているのは、なぜであろうか。山号を吾平山といい、また吾平寺と寺号を置くことは、(字重なりで)みにくいと思つてか、この「相良」という文字に変えて用いたものであろう。

わが小倉の家の中西田直親氏に、このようなこととお話したところ、師も大変喜ばれた。

あの寺にまつる観音菩薩を、安産の神と里人が祈る理由を考えよう。この吾平山上陵に鎮まる彦波瀲武鸕鷀草葺不合の尊は海神の娘、豊玉媛の命の腹から生まれた天皇である。父神の彦火火出見の命が海神の国にお出でになつてすでに三年を過ぎたのち、国に帰ろうとしたところ、かのわたつみ神の娘、豊玉媛の命は、皇孫の神を引きとめて申しあげた。「すでにあなた様がこの国にお出になつてから、思いもかけず、お情けに馴れ振るまい、いまは隠しても隠れようもなく、御子をさえ下賤の身に宿し、産み月も押しせまつております。いやしいわたつみの国で御子を産みたてまつるのははなはだ恐れ多いことです」などと、さめざめと嘆かれたので、天皇は隣れに思われて、いろいろと約束をされた。

豊玉媛は「雨風の激しい夜をお待ち下さい」などと申しあげたのに、一途な天皇は国にお帰りになり、浜辺に新しい宮を造られた。いまだその新産殿の屋根も葺き終えないうちに、皇后がはいられてお産みになった大神が、鸕鷀草葺不合の命である。いま、産屋のうゑに鸕鷀の羽をさせば、難く生まれるなどと、俗に言いつたえるのも、この神がいとも安らかにお生まれになつたという伝承に

ならつてのことである。

また名を鸕鷀草葺不合の命というのも、いまだこの産屋の葺き終らないうちに、安らかに生まれられたからである。

このようなゆかりある大神の陵であるから、国の人たちが安産の神だと崇めたのであろう。

こんなことも証明になりうることだから、記しておく。

さてこの日向村というのは、吾平山から半里(二キロ)ばかり西方にあつて、里人のよく知つたところである。

神代の様子と、この地名の言い伝えは、少しも違つていない。

『日本書紀』に、ただ日向の吾平山といつているのを、日向の国とばかり思われて、『帝皇略譜』などには、「かくれられたところは西洲の宮、御陵は日向吾平山上陵」といつている。

下に日向の国とさえ書かれているのは、『日本書紀』の本意ではない。むかし「日向」といつたのは日のよく当たつてゐる地をいうのである。

それは竜田風神祭の祝詞にある「わが宮は朝日の日向ところ」とあり、また『万葉集』には「芳野の日向に」とあり、『古事記』『日本書紀』ともにすべてこのようにいつている。

「朝日のただ刺す、夕日の輝る筑紫の日向」など、どの書にも日のよく輝るところをいつている。俗にいう「日向」ということである。

さて、いまの日向の国の名の起りも、この意味からはずれたものではない。